

## 今後の研究に向けて

本研究活動報告書において報告した、1年間にわたって実施した研究活動は、「予備的・準備的研究」と位置づけられている。将来的な研究の目的は、特別支援学校における重度・重複障害のある幼児児童生徒の個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成と、それに基づく適切な教育の実施について、課題解決の方策を提案することである。具体的には、的確な実態把握や、目標と指導内容の設定、適切な評価と指導・支援の改善というPDCAの過程に必要な視点や情報を提供する活用パッケージを作成し、現場での活用のしやすさや有用性を検証することを目指すものである。

今年度の研究活動としては、まず、学校現場における課題の整理、及び、関連文献の収集と整理を行った。さらに、整理した情報に基づく研究チームメンバーでの議論を通して、情報活用パッケージに含む内容の項目案を作成した。項目案には訪問した数校の教員からフィードバックをいただき、それを反映することができた。さらに、活用パッケージの分冊の構成やコンセプト等についても検討が進み、本報告書提出時の段階で2項目の具体的な内容について提案することができたことは、大きな成果であった。

今年度の予備的研究の目的であった「現場における現状把握と課題の分析、及び課題解決の提案のためのデータと資料の収集を行うこと」は予定通り達成でき、次年度より専門研究Bを実施するにあたっての必要な準備が、概ね整ったのではないかと考えている。以下、今年度の研究活動の成果から次の研究を進めるにあたってポイントと考える事項、および、今後の研究計画に関連した事項を述べる。

### 1. 今年度の研究活動から

本年度の研究活動を進める中で確認された事柄で、次の研究を行う上で重要と思われる点について、改めて3点を掲げる。

#### (1) 情報をパッケージで提案することの意義

重度・重複障害のある子どもの教育関連の文献は、すでに数多く出版されている。しかしながら、それぞれの文献の情報は断片的で、様々な領域からの支援を必要とする子どもの教育に総合的かつ具体的な提案ができるものは、これまでに日本にはみられなかった。

また、多くの学校現場では、実態把握、教育計画作成、学習内容と方法の決定と実施、評価と改善という、従来からある一連の学校教育活動を充実させることも課題であるが、それに加えて、ICFやキャリア教育の視点をどのように織り込むのか、といった対応に多くのエネルギーを注いでいた。すなわち、保護者との連携、家庭や地域での生活、将来に向けた取組等の視点は、障害の重い子どもの教育にとっては古くて新しいテーマではあるが、それらを可視化できる形で、個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成と実施に反映させようとしている学校現場の状況がある。

これらの状況を考えるとき、「軸となる考え方」を整理し、パッケージとして提案することの必要性を再認識した。欧米では、現場の教員にとって必要な具体的な情報を提供するツールが数多く開発されているので、内容面・構成面で参考にしていきたい。

### (2) 「重い障害がある子ども」に焦点をあてることの意義

この研究のタイトル上は、対象が「重度・重複障害のある子ども」となっているが、学校現場では、いわゆる重度・重複障害のある子どものケースのみでなく、感覚障害と知的障害を重複しているケース、重い自閉症のケース等、障害の程度が比較的重度で、学習や生活に様々な領域からの支援を必要とする子どもの教育への対応に関する課題が見受けられた。今後作成を計画している情報活用パッケージは、これらの「重い障害がある」と言われている子どもたちの教育に活用できるものとしたと考えている。対象となる子どもは、肢体不自由の特別支援学校のみでなく、知的障害、視覚障害、聴覚障害、病弱、いずれの特別支援学校にも在籍することが考えられる。

情報活用パッケージは『『重い障害がある子ども』の教育に必要な専門性を改めて整理する』という意味でも、作成の意義があると考ええる。多くの学校では、重い障害がある子どものキャリア教育の検討課題として、「知的障害教育で行っていることの焼き直しではなく、重い障害のある子どものニーズに応えるものにするにはどうすればよいか」が話題として挙がった。また「ICFの考え方を取り入れることによって教員、保護者、多職種等で話し合う基盤ができたが、そこで改めて、重度・重複障害のある子どもの教育の専門性を問い直す必要を感じた」という声もあった。

障害の程度が比較的重度で、学習や生活に様々な領域からの支援を必要とする子どもの障害の状況や生活・学習環境は千差万別である。この情報活用パッケージのコンセプトとしては、「障害に対応したマニュアル」ではなく、教員に基本情報や考え方を提供したうえで「考えることをサポートするツール」とする工夫が必要である。

### (3) 共有できるツールを目指すことの意義

「実態把握・目標と指導内容の設定・評価と指導・支援の改善」という一連の教育活動は、一人の教員で行うわけではない。学級、学年、学部、学校全体といった、チームでの取り組みが基本となる。しかしながら、多くの学校現場では、転勤等で教員の入れ替わりがあったり、若い教員や重い障害のある子どもを担当したことのない教員が増えていたり、という厳しい現状がある。情報活用パッケージは、子どもの実際の教育計画の作成・実施・評価に具体的に役立つものであるが、一方で、チームで共通理解を図ったり、経験の少ない教員の研修に用いたり、等、様々な活用の仕方が考えられる。また、保護者、様々な領域の専門家との連携や協働を促すツールともなる。学校内外で「共有できるツール」を目指すことを目指したい。活用の方法については学校現場目線からの提案を期待したい。

## 2. 今後の研究計画に関連して

現時点で計画している、今後の研究活動は、以下のとおりである。

- (1) 選定した項目についての情報収集
- (2) 情報活用パッケージの試作
- (3) 研究協力校における情報活用パッケージ（試案）の活用
- (4) 研究協力校からのフィードバックと内容の確定

今後の研究活動を上記の計画で進めるにあたって、検討中のあるいは検討すべき課題を掲げておきたい。

### ○ 情報活用パッケージの項目案、分冊案について

今年度実施した課題整理の結果等から研究者の立場で項目案、2つの分冊案を作成した。項目案や分冊の構成、コンセプト等については、あくまで現時点のものであり、次年度、研究協力者、研究協力校を交えて検討を継続する必要がある。

### ○ 研究協力者とその役割について

情報活用パッケージの内容は重複障害のある子どもと家族、教員のニーズに応えるものにするため、多岐にわたる。研究協力者には、医療、福祉、卒後の施設、教育行政、教員養成（研究）など様々な領域の立場からのご協力をお願いできるように、人選を検討した。また、研究協力者には、専門領域に関連する分冊内容の監修、可能であれば執筆をお願いしたい。また、特に「本人中心の計画」アプローチをどのように参考にして内容面に書き込むか、については、文部科学省の立場からの助言が望まれる。

### ○ 研究協力校（公募）の条件について

前述したように、この情報活用パッケージは、いわゆる重度・重複障害のある子どものみでなく、感覚障害と知的障害を重複しているケース、重い自閉症のケース等、障害の程度が比較的軽度で、学習や生活に様々な領域からの支援を必要とする子どもの教育に活用できるパッケージにしたいと考えている。対象となる子どもは、肢体不自由の特別支援学校、知的障害、視覚障害、聴覚障害、病弱・身体虚弱のいずれの特別支援学校にも在籍するため、研究協力校の選定にあたってはその点を考慮したい。また、「実態把握、目標と指導内容の設定、評価と指導・支援の改善」において、「地域での生活や将来を見据えた目標設定」「他職種との連携」などの課題に、学校として組織的に取り組もうとしている学校が望ましいと考える。

研究協力校には、情報パッケージ試作の過程では、項目案や内容案についてフィードバックをいただく他、可能であれば執筆をお願いすることもありうる。また、次に述べ

る情報パッケージの試行を依頼する予定である。

○ 情報活用パッケージの試行について

情報活用パッケージの研究協力校における試行については、当初の目的では「現場での活用のしやすさや有用性を検証すること」としていた。具体的には、児童生徒の計画立案等への活用の効果（保護者への影響等も含む）、教員の意識や実践の変化、等の検証を考えていたが、加えて、各協力校においてどのように活用するか、についての検討を依頼する必要性を感じている（例えば、研修での活用、学年・学部でのケース会議等での活用等）。この試行を通じて、最終的には情報活用パッケージの中に、「このパッケージをどのように活用するか」という情報を分冊で入れることを検討している。